

ホトトギス

十二月号

ホトトギス

創刊二十一年十二月号
昭和二十一年十二月一日発行
発行所 東京 丸の内 丸の内郵便局
印刷所 東京 丸の内 丸の内印刷局

千五百号



風雅の小筥（四十七）

廣太郎

毎月雑詠選をされていて思うのだが、御投句になられる方は、どの季節の句をお出しになっておられるだろうか。実際何人かから、電話を頂き「雑詠に投句する句は、掲載予定の号の季節か、それとも本が送られて来てから締切迄の季節ですか」という意味の御質問である。例えばこれを書いている時号点での最新号は令和三年九月号で、投句用紙の掲載は一月号であるが投句締切は九月二十日となっている。結論から申し上げると、「雑詠」の言葉から想像出来るように、季節は自由なのである。それでも傾向としては、掲載号の月に合わせる句となれば、実際の投句時期と季節がずれて、作者としては少し詠み辛いのではないかと思う。実際この稿を書いている九月中旬、雑詠選をしていると、やはり秋の句が多いようだ。

実は今回はこれから本論で、秋といえば、よく登場する季節の中で、蝉の種類ではあるが秋蝉の代表的なもの一つとして「蝸」がある。現在選をしている雑詠の中にもこの季節で素晴らしい作品は多いが、この文字について、ほぼ全員に近い方々は「虫」偏に旁を「周」とお書きになっておられるだろう。ここでこの蝸の字をよく見て頂きたいのであるが、旁は周の旧字であり、パソコンの中ではちよつと探せなかったが、「土」ではなく片仮名の「キ」に近いといえれば良いだろうか。実はパソコンで探せなかったと申し上げたが、歳時記の中には旁を「周」としているものもあり、少し疑問にも思ったが、漢字には注意したいものである。

旬日記 汀子

令和二年十二月一日 有恒俳句会

これまでと違ふ年末集ひけり
掃く落葉残す落葉もありにけり
ひつそりと祝ふ今年のクリスマス
マスクして出掛ける用意ととのひぬ
マスクの眼やつぱり彼と彼女かな
近づけばやはりマスクの眼は彼女
枯庭としての手入れのありにけり
今日よりは師走の心持ち歩く

十二月一日 無名会

心して迎ふ師走となりしかな
忘れぬし寒さの中にをりしこと
いつもとは違ふ師走でありしこと
師走とて心の添はぬ二三日
寒さにも出掛ける心弾みけり
寒さには弱しそれでも出掛けねば
実感のなき日々師走なりしかな

「俳句」新年号

例年の如くは行かず年迎ふ
いつもとは違ふといへど去年今年
静もりて過ぎゆく時間三ヶ日
家族とは変らぬ流れ去年今年
静けさにあり年迎ふ家族かな
宇宙にも心遊ばせ去年今年

いつ果つる命と思ふ去年今年
上京もままならぬ世や年迎ふ
十二月五日 菅屋ホトギス会

白鳥の旅の思ひ出遠き日々
簡単に今宵おでんと決まりけり
冬の山とて人行き来変らざる
マスクせし目の表情を見のがさず

十二月五日 下朝句会

師走とは思へぬ陽気有難く
毎年よ心のままに過ぐ師走
緊張も生きてゆく道師走来る
快晴といふ明るさに年忘
マスクにもおしやれ心のありにけり
十二月七日 ロイヤル俳壇

短日といふこと心づもりにも
寒いとも人それぞれでありにけり
掃き終へて心して見る冬芽かな
世の中に従ふといふ寒さかな
眼で語るほかなき誰も彼もマスク

十二月八日 大阪倶楽部

在宅といふ短日を余すもの
寒き朝今日の家居の有難く
短日の油断はいつか身ほとりに
昔から寒さに弱きこと承知
立向かふ寒さの外出なりしかな

新春詠

ともかくも年末年始なりしこと
庭師来て新年迎へられさうに
掃かずある落葉の嵩を踏む裏戸
庭掃いて掃いて落葉と戦へる
仕残せし仕事仕上げる年の暮
十二月十二日 夏潮句会

雪深き地を発たれしと聞きしゆ糸
一年をふり返る日よクリスマス
冬ぬくきことがもてなし応接間
書き込んである古曆捨てられず
葉を落したる冬木立広々と
来る客に落葉の庭を案内せん
雪深き地より来られしもてなし
いつ戻るいつもの暮し年の暮
十二月十七日 緋葉倶楽部

師走とは思へぬ日々を常の如
家居して寒さを忘れをりにけり
ふり返ることなく過ぎし師走かな
朝日新春詠

わが余命櫻落葉を掃きながら
改る卒寿の命初日待つ
なつかしき虚子のまなざし年迎ふ
枯庭となりて明るきことせめて
落葉又落葉よ庭を楽しまむ
天辺にマロニエ枯葉なほ存す
掃く前の落葉に名残ありにけり

廣太郎句帳 廣太郎

令和二年十二月一日 ひまわり俳壇新年吟

凍星の 一つに 希望見出して
十二月二日 NHK文化センター

冬芽に押し潰されてゐる 都心
ビル風を 寄辺としたる 冬の蝶
咳をして 世間を 敵に 回しけり
十二月三日 蕉心会

冬 黄葉 一水 隔て 冬 紅葉
晴れてゆく 仔細余所目に 鴨浮寝
雪吊の 縄 引力を 弄び
冬帝と 曇天 招く 雨男
黄落を 舞ひ上 がらせて 鳩着地
水鳥に 囲まれて ゐて 鷺孤高
黄落を 踏めば 都心の 響きかな
万両や 葉裏に 色を 育てゆく
十二月四日 六甲会

うかうかと 生きて アラ 還 冬霞
嘘一つ 閉ぢ 込めて ゐる 冬霞
新霞 伊吹 稜線 掠れ ゆく
粕汁を 吹けば 下り来る 夜の帳
富士山の 頂上 浮べ 冬霞
十二月五日 芦屋ホトギス会

富士よりも 伊吹は 白し 冬の山
おでん酒にも ボルドーといふ 漢
白鳥や 湖に 楽奏で ゆく
咳一つにも 戦ける 車内かな
十二月六日 野分会菅屋例会

猪鍋に 山風 尖り 来りけり
牡丹鍋 丹波に 先祖 探す 旅
楽劇を生む 白鳥の 飛翔かな
白鳥を 水呑ら かく 待つて かり
風音と 水音と 君と 牡丹鍋

十二月六日 青嵐会菅屋例会
日向ぼこ 虚子館といふ 故郷に
聖夜ミサキリエに 灯る 星一つ
十二月十日 土筆会選者選のみ

蘭汁の 中紫に 光るもの
夕闇に 古戰場 めく 枯芒
成道会 鎌倉 五山 閉ざされて
蘭汁の 匂ひに 箸の 止まざりけり
十二月十四日 朝日カルチャー若草旬会

冬木立 黄金に 染めて ゆく 夕日
白き息 喃語となりて 孫来る
夕へ日や 首都は 人出を 拒みたる
数闇に 色明け 渡す 冬木立
閑散と 街数へ 日に 透き通る
十二月十七日 前議員旬会

初雪に 列肖 縮み ゆき に けり
冬木の 芽 日本 の 明日 を 秘めて けり
雑炊を 吹けば 故郷 香り 初む
十二月十七日 登高会

葱刻む 厨に 夕日 招き 入れ
波音は 第二 楽章 浜 千鳥
葬列の 息 白く 行く 墓苑 かな
夕千鳥 啼いて 落日 見送れる
息白く こんがらが がつて ゐる 会話
川千鳥 六甲 嵐 聴いて けり
十二月十八日 廣邦会

熱爛に 酔ひ マーラーに 酔うて けり
校庭に 避難 訓練 朔風 裡
黄落の 繫ぐ 目黒区 江東区
十二月二十一日 北國文芸新春詠

去年 今年 学生 街の オフィス かな
十二月二十一日 田鶴一新春俳句

初電車 都心 を 少し 遠く して
初富士に 今年こそ はと 誓ふ こと

一人 居の 母を 勞ひ 嫁が 君
御降を 引き 摺つて ゐる 雨男
先づ 曆掛ける ことより 事務始
十二月二十二日 若水旬会

事始京は ん なりと 暮れ けける
一万句 選終へ てより 暮早し
虚子の 軸掛 替へ てより 冬座敷
孫の 声ひねも す 聞きて 日短
白銀の 庭 借景に 冬座敷
惑星の 近づくほどに 暮早し
十二月二十三日 目黒学園旬会

輪番の 朝は 早し 納豆 汁
赤光る 冷たき ワイングラス かな
惑星の 二つ 冷たく 相寄れる
海の 紺裂き 凍る 飛び 出せり
鯨の 尾 大海 原を 突き 刺せり
十二月二十七日 青嵐会東京例会投句のみ

枯萩を 未だ 彩つて ゐる 一花
枯草に 音乾き ゆく ハイヒール
枯芝に ゴルフボールの 歪み ゆく
息白く 並ぶ 人気 の ラーメン 屋
夕星に 照らされて ゐる 夕千鳥
十二月二十七日 野分会東京例会ハイブリッド句

会
オーロラを 纏ひ 白鳥 降りて くる
白鳥の 舞へば 相寄る 星二つ
猪鍋や 虚子の 名付け 酒を 先づ
星の 綺羅水の 綺羅 白鳥の 綺羅
十二月二十七日 野分会東京例会忘年吟行旬会

冬紅葉は 並べて 半眼 冬うらら
仏像の 嵩に 境内 鎮も れり
黄落の 嵩に 境内 鎮も れり
綿虫の 仏足石に 来て 消ゆる
箒目の 点景として 黄落す
境内の 艶 冬紅葉 冬黄葉

雑詠 廣太郎 選

語ることに聞くこと多く明易し 長岡 安原 葉
 現れし短夜の星別れ惜し 同
 なつかしや虚子の字の門露涼し 同
 熟寝より覚めて梅雨寒老にあり 相模原 木村享史
 米寿翁涼しき顔でまだ生きて 同
 幹叩きやる大夏木敬してや 同
 限界を崩れざるまま雲の峰 香川 湯川 雅
 鎖す音の残る扇子を開きけり 同
 蟬時雨稿煮詰れば迫り来る 同
 雲間より青を違へて星涼し 龍ヶ崎 今橋眞理子
 さそり座の尾の先までも星涼し 同
 星涼しいつか夜気につつまれて 同
 下校児のカルキの香り百日紅 大阪 酒井湧水
 風鈴の黙せば風を待つ心 同
 夜の秋満たすグラスの江戸切子 同
 海風やバックミラーで拾ふ虹 東京 荒井桂子
 遠泳や搔く前の水前の水 同
 海の日の洗濯槽の波の音 同

沖に出て速さとなりし帆の涼し 鹿見島 上迫和海
 教室に夏服の肩うち揃ふ 同
 日記書く網戸の風に三日分 同
 泳ぎから戻りてパンにハム挟む 東京 阪西敦子
 木下闇出てゆくときも目をつぶる 同
 風鈴の窓歓声はテレビより 同
 糸のごとくに初蟬の鳴きいづる 熊本 岩岡中正
 余生とはかくもしづかに植田かな 同
 虹に脚人にふるさとありにけり 同
 羽抜鶏立派に時を告げにけり 徳島 岩田公次
 一本というて真鱈の大きかり 同
 玉葱の香に国生みの島活気 同
 盧舎那仏極暑の闇に鎮座せる 奈良 古賀しぐれ
 蟬に蟬重ね神の木仏の木 同
 春日野の蟬死す千年の礎石 同
 幕間の二十五分のソーダ水 神戸 山田佳乃
 終日青き水音してキャンプ 同
 この一樹だけは毛虫を許さざる 同
 滝音の滝音を追ふ早さかな 同
 亡き人の歳はとらざり水中花 同
 ただ海を見てゐる夕べ夏の果 同
 日から日へ蜜から蜜へ揚羽蝶 袋井 湖東紀子
 日輪のゆらりと高し夏薊 同
 夜の静寂脱ぎ喧噪の暑さへと 同

雑詠句評(十一月号より)

湖中句碑下五の沈み梅雨出水 奈良 古賀しぐれ

家族分シートはためく梅雨晴間 横浜 高浜礼子

「湖中句碑」とは誰もが知る、堅田の満月寺・浮御堂の傍、琵琶湖の中に建立されている虚子の「湖も此の辺にして鳥渡る」の句碑。一、五メートル程の細長い石碑にと刻まれているが、「下五」即ち「鳥渡る」が湖に浸かる程とは相当はげしい梅雨出水だったに違いない。琵琶湖の水位がいくらと言われても想像できないが、具体的に、「湖中句碑」の「下五」即ち「鳥渡る」の所が「沈み」と言われると、琵琶湖の水嵩が想像でき、梅雨出水のひどさが分かる。無駄な言葉が無く、的確な写生が琵琶湖の梅雨出水の大きさを語っている。(むつみ)

湖中句碑といえば琵琶湖の浮御堂沖にある虚子句碑が有名だが、先年水上バイクが衝突して折れ、修復されたのは記憶に新しいが、琵琶湖の広さから、何時もは台座が見えるこの句碑の下五が消える程の水位は相当な出水であったのだろう。異常気象の様子も見て取れる。(廣太郎)

梅雨晴間、そのチャンスを生かして洗濯をしたのである。家族全員のシートが干されていて、それが風にはためいているのである。

真つ白に輝きはためいているシート、幸せ一杯である。

(とは歩)

梅雨の間、やはり主婦にとつて困るものの一つは洗濯物の外干しだろう。屋内で干してもなかなか乾かず、結局乾燥機等に頼ってしまう。そんな中貴重な梅雨晴間は恰好の洗濯日和である。特にシートのような大きなものは外で干すのが一番である。何か洗濯物が喜び踊っているような景である。(廣太郎)

天地有情

い子選

汗をかき季節が好きで永らへし
 誉められるほどの元気に老の夏
 浅き春合格通知待つ朝
 いぬふぐり地球の鼓動伝はり来
 ささやかな一人の自由旅涼し
 ひとり身の気儘な旅路五月晴
 炎帝と玻璃一枚をへだてたる
 飲んでみたかりしビールは苦いだけ
 虹立ちていよいよ小さき我となる
 詩といふ心の虹を架けんとす
 湖中句碑土用太郎の波うねる
 土用 風 一帆湖に 囚るる
 親子とは許し許され月涼し
 過去帳に師の名加はり夏椿
 青春の黴の一書をまた書架に
 月涼し遠き日の旅引き寄せて
 瀬戸の海出船入船赤とんぼ
 窪みたる母の硯を洗ひけり

相模原 木村享史
 同
 東京 稲畑廣太郎
 同
 長岡 安原 葉
 同
 東京 今井千鶴子
 同
 熊本 岩岡中正
 同
 奈良 古賀しづれ
 同
 神戸 和田華凛
 同
 龍ヶ崎 今橋眞理子
 同
 淡路島 木下圭子
 同

百歳の師の温顔や夏蒲団
 雨音に暮るる山家や夏炬燵く
 庭樂してんたうむしに居つかれて
 指先を起点にてんとむしの空
 はればれと踊り明かせし顔ばかり
 形見ともなりたる踊浴衣かな
 遣り甲斐と思ふ仕事の汗涼し
 初秋と思ふだけでも落ち着きぬ
 約束の流れ海月に付合ひぬ
 尽きさうに尽きさうに思惟夕端居
 夏至なれや直射日光肌を刺す
 五月雨の音重きとき軽きとき
 灯を逸れて死をまぬがれし黄金虫
 ハンカチを振り残照をとどめたる
 トーストが焼けて卵と夏野菜
 コーヒーと葡萄と朝はのんびりと
 川風に仰ぐすぢ雲翁の忌
 帯解やほどいて縫うて三代目

東京 山田閨子
 同
 西宮 本郷桂子
 同
 神戸 三村純也
 同
 宝塚 水田むつみ
 同
 香川 湯川 雅
 同
 八尾 山下美典
 同
 神戸 浜崎素粒子
 同
 鎌倉 星野 椿
 同
 東京 今井肖子
 同